
DesireProtection **ディザイア・プロテクション**

ノノ川玲二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Desire Protection デイザイア・プロテクション

【Nコード】

N3811Y

【作者名】

ノノ川玲二

【あらすじ】

ある晴れた朝、典型的な地味な男子校生・北埜玲矢^{きたのれいや}は、学校に向かってしばらく歩いていた。

学校まであと少しの時に、体力を使い切ったようにふらふらと歩いていて、今にも倒れそうな月夜杏里^{つきよあんり}という少女が声を掛けてきた。

杏里には行きたい所があるらしく、放って置けない玲矢は目的地ま

で運ぶ事にした。

杏里を運ぼうとした直後、玲矢の前に男が現れた。

そして、男はいきなり姿を変え、機械の塊の様な化け物になって襲い掛かって来た。

玲矢は杏里を連れて必死に逃げ続けたが、すぐに追い詰められた。

もう駄目だと思ったその時、化け物の前に立ちはだかったのは、鎧の様な物に身を包んだ杏里だった。

動揺している玲矢に杏里は逃げるように言い、化け物と戦い始めた。

第1話 鎧のセイセイ

ある晴れた朝、典型的な地味な眼鏡男子校生・北埜玲矢^{きたのれい}は、学校に向かつて歩いていた。

玲矢は基本的早起き苦手で、よく分からない文句を言いながら登校するのが日課であった。

「あー、だりい…」

朝に学校行くのを考えた奴くたばれや」

今日も学校の創立者に失礼なのかよく分からない文句を言い、玲矢は学校に向かう。

今日もいつもと変わらない朝、いつもそこにあった日常がやって来る…はずだった。

しかし、今日はいつもと違う日…

それどころか、この日から彼の日常というのは消えてしまったと言ってもよかった。

高校まであと10分という時、玲矢は奇妙な少女を見付けた。

その少女は玲矢よりも少し年下の様で、日本人らしい凜とした顔付きをしていながら、それと対照的に輝く銀髪を持っていた。

見掛けない制服を着ていて、足取りが覚束ないようで、ふらふらと倒れそうに歩いている。

いかにも、体力がありませんという雰囲気醸し出していた。

「大丈夫か、あれ…」

そんな独り言を言っていると、少女が玲矢に向かって歩いて来るのであった。

「あ、あのう…」

「うつ…」

少女が捨てられた子犬の様な目をして、今にも消えそうな声で話し掛けて来た。

（うわー、無視しずれえ…）

でも、俺女子と話すのあんまり好きじゃないんだよね…）

玲矢は内心そんな事を考え、少女を無視しようとした。

…のだが。

「ぐすつ、ぐすん…」

あのうう…助けて下さいませんか？」

「ぐうつ…！」

少女は、大切な家族を失ったような切ない目で見詰めてくる。

（…、これは無理だな…）

見るに堪えられなくなった玲矢は、これ以上か弱い少女を無視する出来なさそうので、仕方なく話を聞く事にした。

「…えーと、何？」

話ぐらいなら聞いてあげるけど…」

「あ、ありがとうございますっ！

え、えっ、えーと…」

何故だかお互いにぎこちない会話だった。

少し間、小さな沈黙が二人の間を駆け抜けた。

「・・・」

気まずさから生まれる嫌な空気だった。

だが、そんな空気を打ち破ったのは少女だった。

「あのっ、実は頼みたい事がありますっ」

「…頼みたい事？」

「あんりは行きたい所がありますっ。

しかし、あんりの体力はもう限界でしてっ、良ければ貴方に運んで貰いたいんですっ！」

「お、俺に…？」

「はいっ！」

あんりと名乗る少女は屈託の無い笑顔で、元気よく頷く。

（うわー、断りづらい…

いや、女子運ぶなんて俺には…）

玲矢が迷っていると、あんりは追い撃ちをかける様に言った。

「ぐすん、えぐっ…
うう…ダメっ…？」

「ぬぐうつっ…！！」

あんりはさらに、世界から見捨てられそうになっている様な切ない目で玲矢を見詰めて来る。

さすがに折れるしかないと思った玲矢は、ため息をついてしゃがんだ。

「あー、もう、分かったからさ。
とりあえず、泣くなよ…
運んでやるから」

「えっ、いいんですか！？
あ、ありがとうございます！
貴方は私の唯一の救世主ですっ！！」

「そんな大袈裟だっ…」

涙を拭き取ったあんりは、万遍の笑みで玲矢の背中に飛び付いた。
今まで見たことも無いような純粋な笑顔に、玲矢は照れてしまっていた。

「はあ、参ったな…」

嫌になるぐらいの純粹さなんて反則だろ…」

「んっ、どうかしましたか？」

「い、いや何でも無い。

それよりも、何処に行きたいんだ？」

「えーと、第一猪瀬だいちのせ高校という場所です！」

「はあ！？」

思わぬ場所の名前に、思わず荒い口調で返してしまった。

なぜなら、玲矢が通っている高校こそが、その第一猪瀬高校だからだ。

玲矢がいきなり大声を出したせいで、あんりは縮こまっていた。

「ひゃっ、怖い…」

「あ、ごめんな…」

そこは俺の学校だから、ちょっと驚いてさ」

「…！！」

あんりはガバツと背中から飛び降り、玲矢の顔を見詰めて言った。

「私、その学校に転校して来たんですっ！
それで、今日は登校初日という訳でして」

玲矢は内心、転校して来た初日から体力無くて行き倒れるってダメだろと思った。

「あー、なるほどな。
道理で見掛けない制服だったのか…」

「そうなんですっ！
本当はちゃんと指定の制服で来たかったんですが、転校してたのすっかり忘れてましたっ」

「いや、ダメだろ…」

あんりは、てへっと言った。

普通ならそんな事しても済まされないぞ。

「まあまあ、制服を二年間も着ると身体の一部見たいなもんですからねっ！
間違えても仕方ないじゃないですかっ！！」

清々しい程の開き直りである。

それでも、気持ちは分からなくては無いが。

「あ、二年間着たって事は二年生なのか？」

「そうですね、立派な二年生ですつ。

よく一年と間違われますね。

全く、失礼な人ばかりですつ！」

「あつ、ああ…」

ソウダナ、失礼な奴ダヨナ…

俺ハちゃんと同級生ダツテ分かってたヨ」

『ごめんなさい、実はそう思っていました』と思った玲矢は、動揺して変な喋り方になっていた。

あまり正直に言い過ぎると、泣くかも知れないし。

「まあ、同じ学校で同級生なんだ…
一応、自己紹介しとくよ。

俺名前は、北埜玲矢だ」

「よろしく、北埜君だねっ！

つきよあんり
私は月夜杏里っ！！」

その時だった、二人の目の前に何か超高速で突っ込んで来た。
無機物と無機物がぶつかった様な音が響く。

「う、うわぁ!？」

そこに居たのは、金属の塊だった。

生気の無い無機物がそこに居た。

「ファントム浮遊鎧っ!!」

それを見た杏里の表情ががらりと変わった。

その時の杏里は、今まで見た中で一番冷たい表情をしていた。

「おい、杏里どうしたんだよ…?」

「北埜君、逃げてっ…」

「へっ…?」

今なんて言っ…」

「いいから、行って!」

こいつは、あんりが何とかするからっ!」

杏里があまりにも必死なので、玲矢は思わず後退りをしていた。

それと同時に、先程玲矢の立っていた場所に、巨大なナイフの様な刃物が突き刺さっていた。

「うわっ！

なんだこれ、危なっ…」

その攻撃が起点になって、その無機物の様な化け物が刃物を振り回して暴れ始めた。

「うわああああっ…！」

「北埜君、下がって！」

そう言った杏里は、いきなり玲矢と化け物の間に割り込んで来た。

「あ、杏里！

逃げないと…」

「…あんりは逃げないよっ…！」

「お、おい！？

逃げないでどうするんだよ…！？」

「あんりは…戦う!!」

その瞬間、杏里の身体をまばゆい光が包む。

全身が覆われたと思った時、杏里を包んでいた光が散乱した。
光の中から現れた杏里は身体は、ドレスの様な鎧を装備していた。

「あ、杏里…!?!」

「後はあんりに任せて逃げてっ!!」

杏里は何処からか取り出した弓を構えて、金属の塊に向かって行った。

「…クソッ!!」

「一体、何だっというんだよ!?!」

すっかり混乱してしまった玲矢は、半分投げやりのように逃げ出した。

玲矢は頭を抱えながら走っていた。

玲矢の背後では、爆発音や金属音がしている。

おそらく、杏里があのだけ物と戦っているのだろう。

玲矢の脳裏に声が響く。

- お前は、女の子を見捨てて逃げたも同然の事をしたのではないか？ -

「だ、黙れ…」

- いつまで経っても、お前は昔のままか？
いじめっ子から逃げてばかりのあの頃と！！ -

「黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れエ！！」

大声で叫んで心の声を掻き消そうとした。

いじめられていたあの小学生時代…
思い出したくもない。

しかし、声は容赦無く心を痛み付ける。

- お前は杏里見捨てた！
また逃げたんだ！！ -

「…違う！
見捨てなんかしない！！」

- じゃあ助けに行けるか？
初対面の相手を、命に代えても助けられるか？
お前は戦って死ねるか？ -

「いや、それは…」

- なら、命に代えても戦え！
力無く戦って死ね！！
お前みたいな奴なんて死ねよ！！ -

「や、止める…」

- 死ねよ！
死ねよ！
死ねよつ！！
死いねよ！！
し死いねよ！！！！
し死ねよつ！！！！

し死いねよっ！！！！

しいい
ねえ
ええ
つつ
!!!!
-

「止めろおおおおおつ！！」

玲矢は立ち止まり、頭を抱えて叫んだ。

丁度その時だった。

「君、大丈夫？」

「え…？」

絶叫をした彼の背後から声が聞こえた。

声がした方に居たのは、玲矢より少し年上に見える黒い女の子だった。

一言で言うなら、何から何までが黒い。

髪の毛、フード付きのコート、瞳の色……

これら全てが真つ黒だった。

ただ一つ黒く無いのは、露出が殆ど無い真っ白い肌の色だけだった。

「どうしたの？」

さっきの叫び方は普通じゃないよ？」

「俺…逃げて来たんだ。

頭が混乱して、化け物を目の前にして杏里を見捨てて…」

「むう…」

黒い女の子は、何か不満げな表情をしていた。

「本当に見捨てて逃げて来たの？」

君はそんな事する人では無い気がするけど…」

「な、何を根拠に…」

「ブラックさんは、人の性格を見抜くのが得意だからね」

「…ブ、ブラックさん？」

聞き慣れない一人称に、玲矢は首を傾げた。

自称ブラックさんは、得意げに喋り出した。

「それは、私の名前。

私は、ブラックさんって言うのよ」

「それは…本名ですか？」

「私が自分で付けたの。」

ね、ブラックなんて、私に相応しい名前でしょ？」

「ま、まあ…」

名は体を表すとか言うけれど…」

玲矢は多少引き気味で頷く。

それでも、ブラックさんは満足げな表情をしている。

「それに、杏里の事もよく知ってるからね！。

多分、助けてもらっんでしょ？」

「…！！？」

玲矢は心を読まれたような感覚に陥って、冷や汗が出てきた。

何故…杏里の事を知っているんだ？

恐怖感に似た感覚が、玲矢を取り巻く。

「な、なんで…」

「ふっふっふっ…」

君、凶星ね？

だって杏里は、私が『解放』させた一人だもの」

「か、解放…？」

「そう、欲望の解放…」

ディザイア・プロテクション
欲望の鎧の力の解放よ！」

「ディザイア・プロテクション
…欲望の鎧？」

玲矢にとって、今日は知らない言葉をよく聞く日になった。

「なんだ、その中二病臭い名前は…」

「何よ、失礼ね！」

君はこの力を馬鹿にしているの！？」

「いや、そこまでは…」

「その力を使えば、杏里を助けられるわよ」

「…！！」

玲矢は、杏里を助けられるという言葉に過剰なまでに反応した。

「あ、杏里を…」

助けられるのか!?

もう逃げなくていいのか!?

「そ、そうよ...?」

何だか急に食いつきが良くなったわね?」

「ああ、当たり前だ!

これは自分を変えられるなら、それ以上の望みは無い!!」

玲矢は、自分の中に存在するもう一人の自分の声から解放されたいと必死だった。

(もしこの人の言うことが本当ならば、もう自分を責めなくていい...! 責める理由なんて無いんだから!!)

その時の玲矢は、ある意味狂っていたかも知れない。

だが、ブラックさんはこれまで自分の力を知った人間が、何度も玲矢と同じ様な反応を見てきた。

別に今更驚く事でも無い。

「はいはい、落ち着いてね? でもね、『解放』にはちよつとした代償が必要なのよ」

「代償…？」

ディザイア・プロテクション
「欲望の鎧は、自分の欲望…もとい、求める強い感情を強化して具現化させる能力よ。」

だから—その強化する感情と真逆の感情が、完全に消滅するの」

「感情が…完全に消滅だって！？
ええと、それはつまり…」

「一種の脳障害に陥るって事よ。
それでもいいかしら？」

「うう…」

さすがの玲矢も迷った。

なにしろ、脳障害を患ってまで力が欲しいのかと言われれば嘘になる。

なるべくなら、そんな事はしたくない。

（でも…

俺はこれ以上逃げたくない！）

玲矢は心でそう誓い、ブラックさんに向き直った。

「その覚悟無いなら、力の『解放』は…」

「待ってくれ！」

覚悟なら…ある…！」

玲矢の真剣な眼差しに、ブラックさんは意外そうな顔をしていた。

（この男子、思ってたよりも度胸があるのね…
これなら、儀式をしても大丈夫そうね）

ブラックさんは内心そう思っていた。

もちろん、玲矢はそんな事は知るはずもなく…

「だ、駄目なのか…？」

「あ、いや、ごめんね。

少し考え事をね…」

急に覇気の無くなった玲矢の声に、ブラックさんは我に帰った。

「ゴホン、では確認するわよ…
二度と普通の人間には戻れないけど、そうまでして力を『解放』する覚悟はある？」

「…あるぜ！！」

「よし、大丈夫ね！」

これから『解放』の儀式を始めるわ」

ブラックさんは、玲矢の額に手を翳して言った。

「鍛冶師の名において『解放』する…

汝の鎧を整形せよ！！」

「…っ！！」

その瞬間、玲矢は額に手を突っ込まれ、脳内を掻き回されている様な感覚に襲われた。

痛みは無いが、何とも気持ち悪い感覚だった。

「よし、これが君の欲している感情ね…」

ブラックさんは、何かを掴んで引つ張り出す様な動作をした。

その瞬間、脳にあった何かが消え失せた感覚と、新たに脳に何か宿った様な気がした。

玲矢の頭には、まだ何かの余韻が残っている。

それが完全に収まらない内に、ブラックさんは話し出した。

「さて、これで欲望の鎧の『解放』は成功したわ！
さあ、杏里を助けに行きなさい！！」

「え、待てよ…
まだ何も教えてもらって無い…」

ディザイア・プロテクション
「欲望の鎧の展開は簡単なの！
自分の欲望をを纏うイメージで…」

「全然意味が分からないんだが…」

今の言葉に腹を立てたのか、ブラックさんは玲矢の背中をぐいぐいと押した。

「ええい、習うより慣れよ！
さっさと行くわよ！！」

「ちよっ…
いやいや、待てよ！？
あー、ちよっと、ブラックさん！！？」

玲矢は、ブラックさんに押されながら引き返えして行った。

「喰らえっ!!」

杏里は弓矢を使い、化け物と奮闘していた。

矢は化け物に命中はするが、虚しい弾き返される。

「くっ!!」

ファントム

この浮遊鎧、私の『リベラシオン・アルク』と相性が悪すぎるよっ

「!」

ディザイア・プロテクション

彼女の欲望の鎧は、フランス語で自由な王妃の名を持つ『リベルテ・レーヌ』。

鎧の名前の由来は、自由意志の感情を『解放』した事から来ている。

武器は、解放の弓を意味する弓『リベラシオン・アルク』だけ…

つまり、近距離戦には向いていないのだ。

「選りに選って、近距離特化の浮遊鎧ファントムが相手なんてっ…
あんりの一番苦手な相手だよっ…」

その浮遊鎧ファントムと呼ばれる化け物は、杏里に追い撃ちをかけるように二本の巨大な刃物で襲い掛かって来る。

「よし、一か八かだよっ！」

杏里も浮遊鎧ファントムに向かって弓を構えて突進する。

杏里が浮遊鎧ファントムの目の前まで来た時、浮遊鎧ファントムは物凄い速さで刃物を振り下ろした。

咄嗟に避けた杏里の頭を巨大な刃物が掠める。

「今だっ…!!」

杏里は隙だらけになっている浮遊鎧ファントムの懷に、貫通仕様の強力な矢を放った。

「…貫けえっ!!」

ザシュ…!!

杏里の矢は浮遊鎧ファントムの装甲を貫通したようで、辺り鈍い音を響かせていた。

浮遊鎧ファントムが、膝から崩れ落ちる。

「よし、勝ったっ…」

杏里がそう言ったのもつかの間、杏里の脇腹辺りを刃物が切り付けた。

鎧が砕け、傷口から血が吹き出す。

浮遊鎧ファントムが膝を付きながら、反撃して来たのだ。

「あぐっ…」

杏里はあまりの痛みに、ダラダラと血が流れ続けている傷口を押さえていた。

傷はかなり深く、激しく動く事すら難しかった。

「あんり…もう死んじゃうのかなっ？」

杏里は生気の無い小さな声でそう呟いた。

そして、浮遊鎧フアントムが杏里に向かって刃物を振り下ろそうとした時だった。

「そんな事…

絶対俺がさせねえ！！」

「…えっ！？」

ガギン…！！

間一髪で杏里を切り付けようとした刃物が、何者かによって弾き返された。

杏里はゆっくりと顔を上げる。

そこには、騎士のような欲望の鎧ディザイア・プロテクションを装備した玲矢が居た。

「き、北…埜君…！？」

「大丈夫か、杏里？」

脇腹から血が出てるが…」

「あんまり大丈夫じゃないかもっ…じゃなくて!!
何で北埜君が欲望の鎧ディザイア・プロテクションを使ってるのっ!？」

「…俺も杏里を助ける為に『解放』したんだ。
まあ、自分の希望もあつたしね…
それにしても、展開できなくて大変だったよ」

「…!」

杏里は意外な言葉に驚いていた。

自分の事を助けたいと言われたのは、生まれて初めてだった。

「さてと…」

まずは、こいつを何とかしないと…」

玲矢は、浮遊鎧ファントムが目の前に向き直り、先程刃物を弾いた槍を構え直す。

「…覚悟しろ、化け物オ!!」

玲矢は雄叫びを上げて、浮遊鎧ファントムに向かって突進して行った…

第2話 カのツカイカタ

「せいっ！

はあぁっ！！」

ディザイア・プロテクション
欲望の鎧の力を手に入れた玲矢は、杏里を襲った浮遊鎧ファントムに向かって
猛攻を続けていた。

そんな様子を呆然と見ている杏里の横に、ブラックさんが現れた。

「杏里！

大丈夫、怪我とか無い？」

「あ、ブラックさん！

脇腹が切られて結構痛いかもっ…」

「傷が深いわね…

ここは玲矢に任せて、動かない方が良いわよ」

「で、でも…

玲矢君は、『解放』したばかりで…」

「多分、大丈夫よ。

相手は手負いだし、玲矢はおそらく強いわ」

ブラックさんは、戦っている玲矢に目を移した。

「玲矢の鎧は、『ブレイブ・キャヴァリイ』…
日本語訳すると、勇敢なる騎兵」

「…？」

何で今そんな事を…？」

「『ブレイブ・キャヴァリイ』の特殊能力が気になってね。
杏里の鎧の『テリトリー・チェイン』みたいなのがある筈…」

「鎧の特殊能力…」

ブラックさんが言う『テリトリー・チェイン』とは、杏里の鎧『リ
ベルテ・レーヌ』の特殊能力である。

その能力は、発動している限り半径5？以内の重力を十倍にして動
きを封じる能力である。

しかし、本人にも負荷が掛かるので、いざという時まで使うのは避
けている。

「でも、北埜君は今日『解放』したばかりだから特殊能力の事は
知らないんじゃない？」

「確かにね…」

まあ、戦ってたら分かるんじゃないかしら？」

「うわー、アバウトですね…」

何処からか投げやり感が感じられるブラックさんを余所に、杏里は戦っている玲矢をじつと見詰めた。

（北埜君…負けないでっ！）

一方、浮遊鎧フアントムと戦っている玲矢は焦っていた。

（い、勢いで戦ってるけど…
未だに、戦い方が全然分らないんだけど！！？）

他人から見れば、玲矢は器用に槍を使いこなして戦っているように見えるかも知れない。

しかし、実際はただ何となく振り回しているだけなのだった。

本当の意味で、ただ勢いだけに任せて戦っているのだ。

「ええい、どうにでもなれやー!!」

玲矢は槍を振り回すの止めて、槍を浮遊鎧フアントムに向けて突進した。
玲矢の頭の中では、友人と遊ぶ時は必ずと言って良い程よくやっ
ているゲーム『デイノ・ハンターズ』の槍使いの動きの映像が流れて
いた。

「喰らえ、デイノハンの突進串刺し攻撃!!」

しかし、玲矢の決死の攻撃は浮遊鎧フアントムに掠りもせず、刃物による反撃
をまともに受けてしまった。

鎧が完全に壊れる事は無かったが、手から腕にかけての装甲が破壊
され、軽い切り傷ができてしまっていた。

「くっ…」

痛ってえな鎧野郎!!」

すっかり頭に血が上った玲矢は、何も考えずに浮遊鎧フアントムに超近距離で
槍を突き付けた。

今度の攻撃は、浮遊鎧フアントムの胴体を貫いた。

グワアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

浮遊鎧フアントムが悍ましい悲鳴が上げ、上半身と下半身が二つに裂けた。

裂けた部分からは、黒い液体を吹き出していた。

「…！」

結構効いたみたいだな…！！

このまま止めを…」

玲矢フアントムが浮遊鎧フアントムの頭部に槍を向けた瞬間だった、浮遊鎧フアントムは上半身だけの体で身を翻した。

「な…！！？」

まだ動けるのかよ…！！？」

傷付いた浮遊鎧フアントムは驚いてる玲矢と自分の下半身に見向きもせず、背を向けて物凄い速さで逃げて行った。

それを呆然と見ている玲矢に、ブラックさんは叫んで言った。

「玲矢、浮遊鎧フアントムを逃がしちゃ駄目よ…！！」

「えっ？」

「傷付いた浮遊鎧フアントムは、普段より格段に狂暴になるわ！」

そのまま逃がしてたら、他の人間に被害が及ぶわ!!」

「そんな事いきなり言われても…」

「いいから追い掛けなさいっ!!」

「は、はいっ!?!」

ブラックさんの気迫に押され、玲矢は急いで浮遊鎧^{フアントム}を追い掛けた。

ディザイア・プロテクション
欲望の鎧^{ディザイア・プロテクション}を装着して走っているのにも関わらず、体は不思議と軽かった。

(よし、この軽さなら走っていられる!)

しかし、いくら走っても前方に見える浮遊鎧^{フアントム}の姿はどんどん小さくなる。

フアントム
浮遊鎧^{フアントム}の移動速度は、走って追い付ける程甘くは無かった。

玲矢から多大なダメージを受けていても、並の人間の走る速度よりは速く動けるようだ。

…
(でも、このスピードじゃ到底あの化け物には追い付けそうもない

一体、どうすれば!?!?)

玲矢は、何か使える物は無いかと辺りを見回してみた。

しかし、周りには人の一人も見られない。

今は通勤時間の真っ只中はずだが、何故か薄暗く不自然な程人の気配が無く、生物そのものが最初から存在していないようだった。

「これも化け物の仕業か…？

くそっ、何か無いのか！？

奴を完全に仕留めれる物は…！！？」

玲矢は、息を切らしながら辺りを見渡す。

相変わらず、町には殺風景が続いていた。

目の前に続くのは、生気を感じられないビル群、沈黙する道路沿いの雑木、黒光りするアスファルトの道、点灯していない電灯、乗り捨てられたように点々と鎮座している自動車、どす黒い雲と灰色の太陽だけだった。

特に見えそうな物は無いと思われる。

…と、思ったその時。

玲矢は、脳内に電流が走った様な感覚に陥った。

それは、昔の事を思い出した時のようだった。

「いや、待てよ……
アレなら使えるんじゃないか!？」

玲矢は立ち止まって、使えそうな物を見詰めた。

玲矢が言うアレとは、自動車の事だった。

「これを使えば、追い付けるかも知れないな……!!」

玲矢は当然運転免許を持っている訳でも無く、運転の仕方をしていく訳でも無い。

アクセルとブレーキの違いさえ分からないぐらいだ。

だが、玲矢にはこの自動車を使いこなせる気がした。

その時の玲矢には、どんな物だろうが乗りこなす自信があった。

「俺なら乗りこなせる……
今の俺なら!!」

玲矢はそう叫んで、勢い良く灰色の自動車の上に乗った。

そして、自動車のボディに自分の右手を押し付けた。

「頼むぜ、『ブレイブ・キャヴァリイ』……
お前の力を貸してくれ!!」

玲矢の頭には、何故か『ブレイブ・キャヴァリイ』の特殊能力の名前が浮かんでいた。

脳内に電流が走ったあの時から、彼は何故だか欲望の鎧の使い方が分かつていたのだった。

（わ、分かる……!
『ブレイブ・キャヴァリイ』の使い方が!!）

ふと、玲矢が車のボディに触れている右手の部分から、魔法陣の様な物が出現した。

「……トレイン・ライト・アーム
『調教の右腕』!!」

次の瞬間、自動車は狂った様な勢いで走り出した。

車は一気に時速100?ぐらいまで加速し、遠くなっていた浮遊鎧ファンタムの後ろ姿が一気に近付いて来た。

て絶叫していたが、時間経つに連れて声が小さくなり、やがて動かなくなった。

その一部始終を黙って見ていた玲矢は、暫くしてから口を開いた。

「これは、倒したって事で良いんだよね…？」

そんな独り言に、何処からか現れたブラックさんが答えた。

その隣には、杏里が脇腹を押さえて立っている。

「そう、貴方の勝ちよ。」

相手の生命反応は、完全に停止しているから」

「そうですか」

「き、北埜君っ！

大丈夫っ！？」

横に居た杏里が、心配そうに声をかけて来た。

玲矢は、笑ってこう返した。

「大丈夫なもんか。」

俺達、絶対遅刻だぜ？」

第一猪瀬高校では、昼休みの時間帯だった。

「はあ、今日程疲れた日は無いな」

玲矢は自分の教室の机でうずくまり、激動の午前中の出来事を思い返していた。

- 以後回想 -

浮遊鎧フアントムとの戦いの後、玲矢と杏里は急いで学校に向かった。

死ぬほど急いだ結果は、やっぱり遅刻。

玲矢は職員室まで杏里を送り自分の教室に向かったが、クラスメイトからの痛い程の視線を浴びる事となってしまった。

全部あいつのせいだ。

しかし、それだけでは終わらなかった。

よりによつて、玲矢のクラスに杏里が転入してきたのである。

担任が一度授業を中断すると言い出した時、頭を抱えていた。

ああ、俺の静かな学校生活が遠ざかつて行く…

- 回想終了 -

「北埜君、北埜君っ！
寝てないで起きてよっ！！」

「ん、ふああ…誰だ？」

眠い目を擦りながら玲矢が顔を上げると、杏里が目の前に立っていた。

「あ、全ての元凶の人じゃないか」

「何の元凶っ！？」

「全部、お前のせいだ」

「何だかよく分からないけど、理不尽過ぎるよっ!？」

杏里は訳も分らず涙目になっている。

玲矢はそんな事より、気になって仕方がない事があった。

「あのさ、杏里」

「うんっ？」

「ちょっと場所を変えて話さないか？」

「えーっ!？」

「どうしてなのっ!？」

「いや、此処じゃ周りの奴らの視線が気になるというか…
転校初日から話してたら、変に思われるというかな…」

遅刻してきた転校生と親しげに話している在校生…

それは、他のクラスメート達の視線を引き付ける標的になっていた。

しかし、杏里は玲矢とは対照的に気にも留めていないようだった。

寧ろ、玲矢の発言を不思議そうな顔で聞いていた。

「んっ？」

どうして他の人に変に思われるのっ？

あんり達の仲が良さそうに見えるだけじゃないのっ？」

「ッ…！！！！」

玲矢は言葉を返す事が出来なくなった。

実際、仲が良さそうに見られるのは間違いは無い。

しかし、玲矢が恐れているのは…

杏里と特別な関係であると思われる事だった。

（くそっ、面倒臭い…！

こいつはどんだけ純粹培養なんだよ！？）

玲矢は、うまく伝えられないもどかしさに唸っていた。

「~~~~~ッ！！」

「えーと、北埜君？

どうしちゃったのっ？」

「き、気にするな…」

多分、お前には一生分からないさ」

「えーっ!？」

酷いよ、北埜君!!

あんり達、共に修羅場をくぐり抜けた仲だよ!？」

その瞬間、聞き耳を立てていたクラスメート達がざわつき始めた。

「修羅場をくぐり抜けた仲!？」

「修羅場って何!？」

「まさか、変な意味じゃ……」

明らかにクラス内の雰囲気がおかしくなってきた。

ガタタツ!!

玲矢は無言で机から勢い良く立ち上がり、廊下に向かって一直線に歩き出した。

「ちょっと、北埜君っ!？」

何処に行くの……って待ってよっ!!」

杏里の言葉に反応出来ない程、この時の玲矢の気分を沈んでいた。

（さ、最悪だ…

もう、転校してしまいたい…）

クラスメートから逃げるように教室を出た玲矢は、いつの間にか観葉植物が生い茂る校舎の裏庭来ていた。

この裏庭は、第一猪瀬高校が建てられる時に、当時の校長の趣味で造らせたものらしい。

しかし現在では、庭の管理を専ら用務員の方々の仕事である。

そんな訳で一般の生徒が近付く事は殆ど無く、玲矢にとって、一人になりたい時に一人になれる貴重な場所だった。

「はあ、やっと落ち着けるな…」

玲矢はこの場所に来ると、必ず庭の隅に置かれた小さなベンチに座る。

このベンチに座ると、まるで日々の疲れを吸い取ってくれているような気がする不思議なベンチである。

今日もいつものように、小さなベンチにどっかりと腰掛ける。

「つたく、杏里め。」

今日会ったばかりなのに調子に乗りやがって。
今度会う時はビシツと言って…」

「きーたーのくんっ!!」

「ウギヤアアアアアア!!」

いきなり後ろから肩を掴まれ、玲矢は悲鳴を上げた。

背後にいたのは、何処からか現れた杏里だった。

「な、なんだよお前!？」

「北埜君がよく行く場所をクラスの人達に聞いたら、何人かが此処だと言ってたから来てみたんだよっ!」

「はあ、マジかよ…」

自分がこの裏庭に居る知っているのは用務員の方々だけだと思って

いたが、そうでは無いらしい。

杏里が言うクラスメートの何人かは、おそらく一度玲矢の姿を見て
いるのだろう。

「で、杏里。

俺を此処まで追い回して何がしたいんだ？」

「お話っ！！」

玲矢は、思わずずっとこけた。

そんな事で大事な昼休みを消費するなよ。

いつでも話ぐらい出来るだろうに…

「むっ！

北埜君、そんな事とは聞き捨てならないよっ！？」

「何でお前は俺の心まで読めるんだよ！？」

「なんでだろう、小さい頃から色々な人にそう言われるよっ？」

「え、今も結構小さいだろ…」

「むうっ、もっと小さい時もあったんだよ！？」

杏里が怒りかけた時、言葉を遮るように予鈴が鳴った。

気付けば、昼休み終了の五分前になっていたようだ。

「あつ、ヤバイ…」

杏里、さっさと教室に戻るぞ！」

「ああつ、北埜君待つてよっ！！」

一人走り出した玲矢を、杏里は転びそうになりながら追い掛けた。

玲矢と杏里が先程までいたベンチの後ろの茂美から、一人の少女が現れた。

玲矢よりもかなり年下、具体的には小学校高学年にぐらいその少女は、全身真っ白だった。

しなやかなツインテールの色も白、着ているドレスの色も白、肌の色も、手に持っている大きな本ですら白だった。

まるで、色を塗っていない塗り絵の世界の住人のようであった。

「あれが、キタノレイヤとツキヨアンリ……
ええと……やっぱり普通の人間と大差無いように見えますわよ、ブラ
ック？」

西洋のお嬢様的な白少女の横に、少女と真逆の格好をしたブラック
さんが現れた。

「私も最初はそう思ったわ。
でも、あの二人には才能がある。
見た目だけで人の心は分からないわ、ホワイト」

「けれど、わたくしにはそれを見抜く力があるはずですわ。
それは、わたくし達の世界で実証済みなのを貴女もご存知でしょう
？」

ホワイトと呼ばれる少女は、不満げな表情で答える。

それに対してブラックさんは、如何にも面白そうな顔で答えた。

「私達の世界とこの世界は違うわ。
違うからこそ、私達はこの世界に来たんでしょ？」

「ええ、そうでしたわね。
ところで、あのお二人にわたくし達の世界の事は話しましたの？」

「いいえ、まだよ。」

玲矢は、今朝『解放』したばかりだし…

杏里の方も、『解放』してからまだ一ヶ月しか経ってないもの」

「どちらにせよ、早い方がいいですわよ？」

わたくしは、『解放』させた人間全員にわたくし達の世界の事を話してありますわ。

なにせ、あの悲劇をこの世界でも繰り返さない為には、人間の感情で生成された欲望の鎧の力を使う以外にありませんもの」

「分かってる…」

でも、少しの間だけ待ってくれないかしら？

私は、もう少し二人を観察したいわ」

「ウフフ、貴女らしいですわね。」

少しならいいですわよ。

ただし、三日以内にお願いますわ。

奴らの二回目の大襲撃が近い気がしますわ」

「大丈夫、それまでには絶対間に合わせるわ…」

ブラックさんは、何とも言えない表情で言った。

その日の帰りのSHR後、帰り支度をしている途中の玲矢は、自分の携帯電話に着信している事に気が付いた。

「あ、見たこと無い番号だ。
一体、誰だ？」

とりあえず、電話に出てみる。

すると、女性の声が聞こえた。

「あなたは、北埜玲矢よね？」

「はい、北埜ですけど…
どちら様でしょうか？」

「玲矢、私の声を忘れたの？
私は、ブラックさんよ」

「はあ！！？」

確かに何処かで聞いた事がある声のような気がしていたが、さすがに電話の相手がブラックさんだとは思わなかった。

玲矢は、何とか平常心を保とうとしながら聞いた。

「ええと…携帯持ってたんですか？」

「まあ、便利だからね。」

それにしても、人間達の技術は凄いわね」

「そ、そうですね…」

人間の技術は凄いと言われても、自分も人間なので気持ちを共有出来ない。

まあ、ブラックさんは『解放』が出来るから人間ではないんだろうけど。

「…あと、どうして俺の携帯番号知ってるんですか？
杏里にも教えてませんけど」

「あ、言ってなかったっけ？

私は『解放』をする時、相手の脳をスキャンするの。

その時にあなたの住所とか、家族構成、携帯の登録してある情報、
性癖とか…

まあ、個人情報色々ともらったからね」

「…プライバシーの侵害って騒ぎじゃないですよ!？」

ブラックさんは、悪戯っぽく笑った。

「いいじゃないの、相手を知ることが、相手と仲良くなる為の第一歩よ？」

「いや、知り過ぎるのはどうかと…」

「玲矢の好みは、黒髪のポニーテールよね？
今度会う時は、縛って来ようかしら？」

「なん…だと!？」

「だったら是非…じゃなくて、余計な気遣いです!!」

「ウフフ、照れちゃって。」

「折角だから、考えといてあげるわ」

「ツたく…」

「何なんですか…」

「ちょっとだけ、年下の子をからかってみたかったのよ」

「全く、迷惑極まりないですよ…」

不機嫌な玲矢に対し、ブラックさんはどこか楽しそうに話していた。

「それはさておき、あなたたち二人に話があるの。
今から、二人で屋上まで来れる？」

「はい、俺は行けます。

でも、杏里が何処に行ったか分からないんですが…」

「分かったわ、私が伝えておくから安心して。

玲矢は、まっすぐ屋上に来ていいわ」

「…分かりました」

杏里に連絡するという事は、おそらく例の脳内スキャンの時に携帯番号を読み取ったからだろう。

「早く来ないと、杏里に玲矢が黒髪ポニーテール好きだって言っちゃうわよ？」

「分かった、分かったから！

変な気だけは起こさないで下さいよ！？」

「ウフツ、分かればいいのよ」

ブツリと電話が切れ、玲矢は魂が抜けそうな勢いでため息を付いた。

「っ、疲れた…」

屋上に着くと、ブラックさんが退屈そうな顔で待っていた。

「あら、早かったわね」

「…早く来いと言ったのは誰ですか？」

「だって、玲矢の好みの子の事、杏里に言いたかったのよ」

「もし、言つてたら…許しませんよ？」

「クスッ、冗談よ。」

そんなに怖い顔しないで？」

二人が話していると、杏里が屋上に上がって来た。

「二人共、お待たせっ！」

急いで来たのか、杏里の息が上がっていた。

ブラックさんはそつと杏里に近付き、何やら話し始めた。

「杏里、ちょっといいかしら？」

「な、何ですか？」

「玲矢が好きな女の子のタイプはね……」

「待てや、このマアアアアアアアアアアアアアアアアツツ
！！！」

叫ぶ玲矢を見たブラックさんは、ニヤニヤと笑っていた。

「ウッフ、言わないわよ。人だけの秘密なものね？」

「恋人同士の秘密みたいに言うなァ!!」

「北埜君、ブラックさんと付き合ってるの？」

「違うわア!!!」

「玲矢、落ち着きなさい。」

静かにしないと、本題に入れないわよ」

「あ、すいません」

「全く、すっかりしなさい？
私の恋人失格よ？」

「その話は、もういい!!」

ブラックさんは玲矢を見てクスクス笑っている。

このままだと、このやり取りが永遠に続きそうなので、玲矢は強引に話を進める事にした。

「…で？」

話って何なんですか？」

「ああ、すっかり忘れてたわ」

「忘れるなよ…」

玲矢に指摘されて、ブラックさんは少しムツとした顔をしていたが、咳ばらいをして話を始めた。

「ゴホン、じゃあ話させてもらうわよ。

それは、欲望の鎧を『解放』したあなた達の使命なんだけど…」
ディザイア・プロテクション

「ん、あの浮遊鎧ファントムという奴らと戦う事か？」

「それだけじゃないわ。

真の使命は、未来から送られて来ている破壊兵ジェノサイドの掃討よ」

「…破壊兵？」
ジェノサイド

「そう、私達と同じく未来から来た破壊兵器よ…」

「み、未来…!？」

予想外の言葉に、杏里はかなり驚いていた。

元々ブラックさんを人間だと思っていた玲矢は、多少は驚いてはいるが、杏里程驚いてはいなかった。

「…未来の世界では、ある日突然と現れた謎の自立破壊兵器・破壊
イド兵が出現したの。」

ありとあらゆる破壊を尽す残酷なまでのその力に、人類は成す術も無くどんどん殺されていったわ。

でも、人類はそんな滅亡の危機に対抗して、人の負の感情を抜き取るなり、増幅するなりで破壊兵に対抗出来る程強固な鎧を作り出す
ジェノサイド
ディザイア・プロテクション
欲望の鎧を完成させたの。

そして、その力を『解放』する私達のような人間・契約者コンタクターが生まれ
た…」

「なるほど、未来ですか…」

未来の人間だから、人間離れした力を持っているんですね？」

「まあ、そういう事ね」

ブラックさんは、得意げに話を続ける。

「それから、人類は破壊兵ジェノサイドとの戦いに勝ち、全てが丸く収まった…はずだったんだけど。

なんと、破壊兵ジェノサイドが過去に飛ばされてしまったのよ。

それで、新たに契約者コンタクターを作り出して、過去の世界に送ったの。それが、私達よ」

「え、ちよつと待った…

今まで俺らが戦ったのは、浮遊鎧ファントムだろ？

そいつは、破壊兵ジェノサイドとは違うのか？」

「まあ、似たようなものよ。

話すべき時に、改めて話してあげるわ」

ブラックさんはそう言った後、屋上の出入口辺りに向かって言った。

「…で、いつまで盗み聞きしてるのかしら？」

「あらま、気付いてましたの？」

そう言って出てきたのは、ブラックさんにホワイトと呼ばれていた少女だった。

「相変わらず勿体振って話してますわね、ブラック？」

「私には、私の考えがあるのよ。

あの任務は、信頼できる人間にしか頼めないわ」

「まあ、それは貴女の判断基準にお任せしますわ。

ですが、時間には限りというものがある事をお忘れにならない事ですわね」

ホワイトと呼ばれている少女は、今までのやり取りを呆気に取られている杏里と玲矢を見て、話し掛けてきた。

「あら、貴方方とは初対面でしたわね？

わたくしは契約者の一人、ホワイト・スミスですわ。
コンタクター

こちらのブラック・スミスとは、旧知の仲ですの。

わたくしに聞きたい事があれば、何なりと…

ああ、いきなり現れて、長々とお話してしまいましたわね。
御免遊ばせ？」

「「は、はあ…」」

あまりの個性の濃さに、玲矢と杏里は引き気味だった。

本当に彼女は、ブラックさんと同じ契約者なのだろうか。
コンタクター

玲矢はとりあえず、少し質問でもしてみる事にした。

「えーと…」

ホワイト・スミスさんでしたっけ？」

「親しみを込めて、ホワイトと呼んで下さっても構いませんわよ？
その代わり、わたくしも貴方を玲矢様とお呼び致しますわ」

「ああ…じゃあ、ホワイトさん。
少し質問しても良いですか？」

「ええ、勿論構いませんわよ。
淑女たる者、隣人の役に立てる存在でなければなりませんもの」

（こ、この人色々と面倒臭っ…！！）

ホワイトさんから契約者の要素を取ったら、痛い女の子だろう。

というか、何も知らない他人から見ればただの痛い女の子だ。

玲矢は頭が痛くなりそうになっていたので、大したダメージを受けていない杏里が代わりに質問をしていた。

「えーと、ホワイトさんは、ブラックさんと何が違うんですかつ？」

「大した違いはありませんわ。
ただ、『解放』の方法がちょっと違いますの」

「どんな風にですかっ？」

「ブラックの場合は、負の感情を抜きとって鎧に変換するのですが、わたくしの場合は、負の感情そのものを強化して鎧に変換できるようにするのですわ」

「…？」

「…！！」

杏里は訳が分からず、間抜けな顔をしていたが、横で話を聞いていた玲矢は大体理解できていた。

「つまり、ブラックさんが言っていた一つの感情が完全に消滅するというのは…」

「そう、それはその感情を鎧として抜き取ってしまっているからですわ。」

貴方方のような抜き取り型の『解放』は、概ね安定した精神での使用が可能で、未来でも大半の鎧はこれに分類されますわ」

「それで…あなたの『解放』の場合は？」

ホワイトさんは、真剣な眼差しになって答えた。

「わたくしの増幅型の『解放』は、感情を抜き取って鎧に変える事はしませんの。」

そのかわり、自分の負の感情を増幅させて、装置したい時に自分で

鎧を構築する能力を差し上げてますの」

「自分で…構築？」

「抜き取り型の『解放』は、負の感情は既に鎧として形成されてお
りますの。」

しかし、増幅型の『解放』の場合は違いますのですね。
感情の増幅具合により、鎧の強度を上げたり下げたりできますの」

「な、何だと…」

それなら俺らが不利じゃないか!？」

「そんな事はないですわよ？」

増幅型の『解放』をした人間は、常に精神が不安定で、簡単に精神
で壊れてしまいますの。

いわば、諸刃の剣ですわね」

「な、なるほど…」

ホワイトさんが色々と説明していると、ブラックさんが遮るように
言った。

「…喋り過ぎよ、ホワイト!!」

会って間もないのに、そんな重要事項ばかり話したら、二人共混乱
するわよ!？」

「あら、お気に召しませんでした？」

貴女が勿体振っておりましたので、代わりにわたくしが話したまで

ですわ」

「ホワイト、あなたは軽く考え過ぎてるわ！
この前も私が同じような事を言っただけに、あの子達が使命を放棄して好き勝手に始めたのを知ってるじゃないの！！」

頭に血が上ったようなブラックさんとは対照的に、ホワイトさんは冷静に答えた。

「力を『解放』してどう使おうが、『解放』した本人の自由ですよ。」

ディザイア・プロテクション
欲望の鎧の使い方によつては、対破壊兵最強の防衛兵器にもなり、
ジェノサイド
破壊兵以上にこの世界の平和の脅かす存在になりかねないのですわ
よ？

だとすれば、最初に全て包み隠さずお話して、鎧の使い方を考えさせた方が妥当ではありませんの？」

「っ…！」

ブラックさんは、顔を悔しそうに歪める。

どうやら、これ以上反論は出来ないようだった。

「それに…」

このお二方ならきつと大丈夫だと思いますわよ。なにせ、貴女と『解放』した方々ですものね」

「…！」

予想外の言葉に、ブラックさんは顔は驚きの色に染まった。

「ホワイト…」

「でも、勘違いしない事ですわ。
もし、そのお二方が裏切る様な真似をした時は、遠慮なく一即処刑
(なぶり殺し)ですわよ？」

「え、それ拒否権ないだろ！？」

思わずツツコミを入れた玲矢に、ホワイトは冷たく言い放つ。

「いいえ、拒否するのは可能ですよ？
わたくし達に勝つ自信があるのなら…」

「え、遠慮します…」

「クスッ、懸命ですわね」

満足そうなホワイトさんを見て、玲矢はげんなりとしていた。

「クソッ、もう引っ越してえ……」

ここは、第一猪瀬高校の三階の空き教室。

そこには、ディザイア・プロテクション
ジェノサイド欲望の鎧を装備した二人組の女子生徒と、機能停止した破壊兵がいた。

「まさか、学校にまで破壊兵が潜伏しとるとはなあ。
ジェノサイドウチらが来なかったら、大変な事になつとるやん」

迷彩色の戦車のような鎧を着た女子生徒が、関西弁でそう言った。
それに対して、黒光りする青い鎧を着た女子生徒がコクリと頷く。

「そっいゃ、エリカ。
ホワイトさんから、二年生に新しく『解放』した二人がいるって聞いたん？」

エリカと呼ばれた少女は静かに頷く。

「せやから、ウチ今からちょっとその二人に会ってみようと思ってるんやけど、どう思う?」

「…会ってどうするの?」

珍しく口を開いたエリカに対し、その関西弁の少女は空き教室の扉に手を掛けて言った。

「とりあえずは、挨拶だけや。」

場合によっちゃ、敵になるかもしれないし」

ふと、関西弁の少女は、エリカがどこか落ち着かなさそうにしているのに気が付いた。

「エリカ、どないした?」

「飛鳥…鎧着たまま会つの…?」

「…………ハッ…!」

飛鳥は、そそくさと空き教室のドアを閉め直した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811y/>

DesireProtection ディザイア・プロテクション

2011年12月16日18時46分発行